

4. 自然災害の怖さ、進化

自然災害は、自然現象と人間と人間社会との作用によるものです。と同時に自然現象は人間による行為によっても影響を受ける繊細なところもあります。卑近な例でいうと、豪雨があると河川が氾濫したり土石流などの災害が発生して、居住域を襲い浸水したり土砂崩れなどを起こしてさまざまな被害を発生させます。人間が定住する前であれば、異常な出水は広い範囲で遊水して、山地では降雨水を十分に涵養されるということで地形が改変されるようなことも最小で済んでいたかもしれません。しかし、河川堤防によって流路を絞り、周囲を開発するあるいは森林環境を悪化させるような一方的な利用を続ければ本来の機能の低下が起きて、自然現象に対する抵抗力が低下することになります。そうすると、自然災害とはいえ、気象の変動も連鎖して、場合によっては人災的なことを要因とする事例も最近多くなってきています。

自然災害の怖さは、いつ、何が起きて、どうなるのかわからないことと、これまでの経験を超えるようなものが、日常的になりつつあるのではないかと思われるます。

わが国の地形、地質、地質構造からして、浸食、風化、変形しやすい性質があって、加えて近代化以降、地形の改変、樹木の伐採が一気に進んだ関係で自然のサイクルが狂ってしまって、潜在化していた災害リスクが顕在化したような面もあるようです。また、巨大地震や大規模な火山活動があると、周囲への二次的に地盤が敏感になってしまって、思わぬところへその影響が派生して、新たな災害が発生するような想定しがたいことも起きます。2011年の東日本大震災から10年経過しても、余震と思われる地震が岩手県沖、宮城県沖、福島県沖、茨城県沖で発生しますし、地殻変動による内部地震も発生し続けているなど、まったく予想予知ができない現状にあります。

自然災害による被害も、不定性で何が、どこに、どの程度のことがおきるのかが想定できないために、避難が遅れたり、適正な判断ができずに犠牲になることも起きてきます。つまり、自然災害の最も怖いのは、突発性とどうなるのかが読めないことになります。とはいえ、日常的に恐怖心を持つと言うこともできず、かといって杞憂では身が持ちません。また、自然災害では、被害の対象が人でありものですが、身のまわりのものは豊富になっていますし、特にインフラなどは都市部では密になっています。そのために地震でも同じ規模のものでも昔に比べれば、対象物も格段に規模も質も異なりますので、当然ながら損害も大きなものになりますし、復旧費用も大きくなるということで自然災害が進化している状況です。

そこで、この怖さを緩和するには、正確な情報が事前に入手できることが第一です。そのために、観測機器の増設やこれまでの経験値解析などを駆使して早期に伝達する努力がなされています。仮にこのようなことが進展したとしても、その情報を活かして適正な行動を起こさないと意味が無いのですが、その一番の障害は「正常化への偏見」といわれる「自分だけは大丈夫」と言うような心理が働いてしまって避難を支援を回避してしまうことです。

自然災害は怖いことには変わりありませんが、まずは自然現象について、その行動を知る、癖を見つける、怒りをキャッチしてかわすということが大事であると思います。

そして、いかに早く、適切な避難行動に移せるのかということに加えて、われわれが自然現象の変異に手助けするような行為を慎むことではないでしょうか。持続可能な自然のサイクルに戻すことで、自然現象のメカニズムを理解し予想することができれば、自然災害のリスクを特定することへのアプローチも少しは見えてくるのかもしれません。